

—モンゴル紀行（その五）—

## ヒヤラガンド村のホームステイ

浦野 裕司

モンゴルの大草原で見る夜空は格別である。一方の地平線から反対側の地平線まで天の川が流れる。川というより大河である。大河を流星が駆け抜ける様は、天体ショーそのものだ。満天の星空もすばらしいが、満月の夜には、趣向の異なるスケールの大きな風景が大地に広がる。満月は日本で見えるものより何倍も明るく、その光を受けはるか彼方までうねりを見せる草の海は、三六〇度広がっている。しかし、その満月に、モンゴル人は日本

人とまったく違う思いを抱くのだそうだと。数年まえの南ゴビの旅で、天も地も月光に満たされている風景に心奪われているとき、通訳として同行してくれたモンゴル人の青年S君が、こんなことを囁いた。「ぼくは、満月を好きになれません」

私は思わず「えっ、こんなにきれいなのに、なぜ」と尋ねた。

「モンゴルでは、子どもが悪いことをすると『月で水汲みをさせられるぞ』と親

に脅かされるんです」

とS君が言う。モンゴルの人々にとって、水汲みは生活する上で必要不可欠な大切な仕事であるとともに、重労働である。その重労働を、月に追いやられて一生させられてはかなわない。子どもにとって、想像するだけで恐ろしくなる罰なのだろう。

改めて満月を見上げてみると、さきほどまでペタンペタンと餅つきをしていたうさぎが、いつの間にか水汲みをする少年の姿に変身していた。新しい知識を一つ得ただけなのに、同じものを見てもその見え方がこんなに変わるものかと、私は新鮮な驚きを感じた。

モンゴルを旅していると、日本人との発想の違いを教えられることがたびたびある。ある年の夏、大モンゴル帝国の旧都・カラコルムへバスで移動していたとき、大草原を行く葬列に出くわした。モンゴル人ガイドが

「あつ、お葬式ですね。みなさん、ラッキーですよ」

と、うれしそうに大きな声を出した。皆がきよんとしている

「お葬式の列は、それを見た人の不幸をみんな持って行ってくれるんです」

なるほど、そんな見方もあるのかと感じ入って、次の句を詠んだ。

大草原行く葬列や今朝の秋 裕司  
そういえば、結婚式を終えて祝福されている花嫁、花婿を見ていたら、

「幸せをもっていけますよ」  
とガイドに注意されたことも思い出される。

今回のモンゴルへの旅は、月の水汲み少年の話を知ってくれたS君の実家を訪問することになった。遊牧を職業としていない定住家庭へのホームステイは、初めての経験になる。遊牧民のゲルで寝泊まりするのが私の好みだが、今回は遊牧民の生活とはひと味違う、モンゴルの農

村生活に触れることができた。そして、数々の「発想の違い」に出会う旅となった。

広大な草原地帯の快適なドライブ

S君はこの年の三月まで日本に留学し、大学院で経営学を学んだ。新聞奨学生として、住み込みで新聞配達をしながらの苦学生である。あまり知られていないことだが、新聞配達をしているモンゴル人は結構いるのだそう。年によって増減はあるらしいが、毎年数十人単位になるという。S君から話を聞くまで、私は外国人が新聞配達をしているなどというこ

とをまったく知らなかった。ベトナム人はさらに多く、数百人単位にのぼるといふ。他の国も含めれば、日本で新聞配達をしている外国人はいったい何人いるのだろう。外国人が新聞配達する苦労は並大抵のものではないはずだ。S君によれ

ば、「寒さは大丈夫だけど、夏の暑さがきつかったですね。モンゴルの夏は、日本みたいに湿度が高くないですから。それから漢字にはとても苦労しました。お客さんの名前を覚えるのがたいへんです。」

自分が遠い異国で新聞配達するなどということを想像すると、とてもじゃないが、そんなことは不可能だと思ふ。S君をはじめとする外国人のたくましさには、脱帽するばかりである。

さて、そのS君の実家は、ウランバートルの北西へ四五〇キロほどの、ヒヤラガンドという村にある。銅やモリブデンの採掘・精錬が盛んなエルデネット市から車で一時間ほどの村だ。重要な輸出資源を有する町、エルデネットまでは、快適な舗装道路が続くし、鉄道も通じている。さすが、モンゴルの経済を支える鉱山町だ。

前夜泊まったウランバートルのホテル

で簡単な朝食を済ませ、玄関で車を待つ。約束の時間にやってきた車は、韓国製のミニバンだった。

「サン・バエノー」（こんにちは）

を言い交して、ハンチングを被ったドライパーと握手する。ドライパーはS君の父親、ハサバザール。わざわざヒヤラガンド村から迎えに来てくれたのだった。今回の旅のメンバーとS君の総勢七名でその車に乗り込み、いざヒヤラガンド村へ出発である。

ウランバートルの町中では、食料品店に寄って、昼食を買い込んだ。また、その先の自動車修理の店では、予備タイヤのパンク修理をした。修理の様子をのぞいてみると、実に懐かしいやり方だった。ホイールからタイヤをはずし、タイヤチューブを引っ張り出して水に漬け、パンク箇所を見つける。そこにゴム糊を塗り、ゴムパッチをのせて木槌で叩く。いったい幾度パンクをしたのだろうか。チューブ

には、無数のパッチが貼ってあった。ゴムパッチだらけの痛々しいチューブを見ていたら、子どもの頃、古いタイヤチューブを浮き輪代わりに川遊びしたこと

を思い出した。さて、混雑するウランバートル市街を抜けると、車は時速六、七十キロで、美しい草原を貫く道をひた走る。ところどころ舗装が剥がれているような道路だが、モンゴルではとても快適なハイウェイに感じる。行けども行けども信号はなく、その代わり、道を横切る羊や山羊の群れが渡り切るのをたびたび待つ。

一度だけ出会った踏切では、長い貨物列車が通過するのに、ずいぶん待たされた。何両なのだろうかと数えてみたら、六十九両も続いたのには驚いた。

ウランバートルを出発して三時間。そろそろ空腹を覚える頃、フロントガラスの向こうに広大な黄色の花畑が現れた。私たち日本人にはお馴染みの風景だ。ま

ぎれもない菜の花畑である。ただし、日本で見るのとはスケールがまったく違うし、季節も異なる。夏空のもとに広がる、一面の菜の花なのである。菜種油を採るために、栽培しているらしい。菜の花に包まれて、パンとソーセージの簡単な昼食を取った。

菜の花畑から二時間ほど走ると、大きな川が見えた。橋の近くに車を止めて、しばし休憩だ。橋の下には、夏の午後強い日差しを避けるために、四、五十頭の馬が集まっていた。目を凝らして広い河川敷を見ると、そこに一台、あちらに一台と、数十代の車が止まっている。水を求めて、あちこちから人が集まり、短い夏を楽しんでいる。

川に別れを告げると、荷台に馬を二頭乗せている小型トラックが前方に見えた。エルデネットで行われるナーダムの競馬に出る馬のようだ。トラックを追い越すと、その先にまたトラックが見える。今

度は馬ではなく人が三人、荷台に乗っている。馬と共にナーダムに向かっていている人々のだろう。追い越しをかける私たちの車に笑顔で手を振ってくれた。

鉱山町エルデネット市街に入ると、近代的なビルが目立った。休憩に立ち寄った展望台からは、スケールの大きな銅鉱山が見えた。

### S君の実家

エルデネットから簡易舗装の砂利道に入り、ヒヤラガンド村に着いたのは午後七時。一昨年の南ゴビまでのバス旅で、道なき道を二日かけて走ったのに比べれば、今回は夢のように快適なドライブだった。

S君の実家に近づくくと、道で十数頭の豚に出会った。S君が「うちの豚です」と、家族を紹介するようにうれしそうに

声を上げる。ちょうど放牧から帰ってきたところだという。豚が道を歩く姿には少しびびくりした。モンゴルでは豚も放牧するのである。

S君の実家は、大黒柱のハサバザールを中心に、家族みんなで協力して作ったとのこと。古い家が一軒に、新築間もない家と新築中の家がそれぞれ一軒ずつ。

それに倉庫、家畜小屋などいくつもの建物が、板で囲われた敷地内に建てられていた。板囲いは、よその家畜が庭に侵入するのを防ぐためだ。庭の一角にはブタ小屋や鶏小屋があり、数百坪の野菜畑が広がっていた。ビニールハウスまであるのに驚く。

S君の実家では、S君の祖母が寝起きする家を、私たち一行のために提供してくださった。居間には立派な仏像と大型テレビが並び、水道のあるキッチンや風呂場まであった。

驚いたのは、トイレだ。広い庭の隅に

真新しい小屋が建っている。それがトイレだという。私たちの到着に合わせて、ハサバザールが建て直してくれたのだ。トイレ小屋に入ってみると、そこにはなんと中国製の暖房便座付き・シャワートイレが鎮座していた。しかし小屋には、水道も電気も通っていない。トイレの蓋を開けて便器の穴をのぞけば、深い堅穴が掘られている。ハサバザールが町で買ったきたトイレ設備らしいのだが、なんでこんなものを買ってきたのだろうか。気分だけでも豪華なトイレにしたかったのだろうか。またまた発想の違いに驚く。

便器の脇には、水の入ったバケツと手桶が置かれていた。暖房便座や温水シャワーなどは望むべくもないが、とりあえず簡易手動式水洗である。本来の機能を發揮することは絶対にあり得ないトイレだけれど、「これはこれで贅沢なものではないか」という気がした。

夕食は、S君の叔母（ハサバザールの

妹さん)の手料理だ。初めて日本人を招待するというので、はりきってご馳走を作ってくれた。モンゴルの家庭料理を想像していたら、なんと韓国料理のメニューだった。彼女の夫・ガントンムルが庭で育てたという大根のキムチ漬け。もちろんご飯もある。キムチチゲに牛肉の炒め物など、本格的な韓国料理なのにはいなく感動した。ガントンムル夫妻は、出稼ぎ先の韓国から、この年の春に帰ってきたばかりとのこと。韓国料理が上手いのも合点がいった。

その後私は、四歳年上のガントンムルにいたく気に入られてしまった。滞在は何度となく話しかけられたり、野菜の自慢話を聞かされたりすることになる。片言ながらモンゴル語を口にしたたり、彼の作る野菜をほめたりしたからなのだろう。彼が育てていたのは、白菜、大根、葱、キャベツ、ニンジン、ジャガイモ、ピーマン、トマトなど、日本でもおなじみの

ものばかりで、どれも立派に育っていた。ガントンムルは元軍人で、現役中は、軍人としてロシアに二度も留学したことがあるという。野菜作りや家づくりに精を出す彼の姿からは想像しにくい、エリート将校だったに違いない。

#### 農村の「正しい朝」の風景

ヒヤラガンド二日目は六時前に目覚めた。早起きしても何もすることがないの、散歩に出かけた。

一昨年の南ゴビへの旅にも参加した友人、A君も早く目覚めていた。そこで、一緒に近くの小高い丘に登ることにした。前回の旅で落馬したいへんな目に遭ったA君だが、山にはめっぽう強い。学生時代にワンゲルで鳴らした山男である。少しでも高い所を見つけると、すぐに登りたがる。

丘へ向かう途中、のんびりした出勤風景

景に出会った。まずは、三十頭ほどの山羊の群れ。誰が先導するわけでもなく、群れは列を作って草を求めて進んでいく。モンゴルの山羊は、いつ見てもほのぼのとした優しい顔をしている。出勤する山羊の顔を撮ろうとカメラを向けると、そのほのぼのとした顔がレンズをのぞきこんできた。あわてて下がってシャッターを切ったが、ピンぼけによってほのぼのさが一段と増した山羊の顔のアップがカメラに残っていた。

車道に出ると、今度は牛の出勤の列だ。道路いっぱいには広がって、ゆっくりゆっくりこちらに向かって来る。棒を持った老婆が、ことさら牛を追い立てるでもなく、ゆっくりゆっくり歩を進める。東京の出勤風景は慌しく殺伐としているが、ヒヤラガンド村の出勤風景は、まことにゆったりしたものである。

牛の出勤風景もカメラに収めて、いよいよ丘に登る。なだらかな斜面もあるの

に、A君はわざわざ険しい直登の道を選ぶ。馬からは落ちても、山なら絶対の自信があるのだろう。こんな所を登れるのかと心配したが、案外あっけなく電波塔のある高みに出た。

村の中央部には、バイカル湖へと続くセレンゲ川が滔々と流れている。登った丘の上からは、セレンゲの流れを眼下に見下ろすことができた。川岸の緑濃い平地には、遊牧民のゲルが二つ見えた。ゲルからは煙が上がり、山羊も牛も人も、のんびり動いている。それまで静かに眠っていたあらゆる命が、朝日に起こされて活動を始める様子が手に取るようにわかる。これこそ「正しい朝の風景」なのではないかと思った。

#### 村の保育園・学校訪問

その日は、ヒヤラガンド村のハラーツアイという名の保育園に向かった。園に

着くと、入り口で女性の園長と管理人がにこやかに迎えてくれた。ハラーツアイとは、鳥の名前で、この保育園を建築中、その鳥が工事現場に巣を作ったのだという。巣で子育てをする鳥の名を、そのまま保育園の名前にするとは、なかなか粋な発想である。

夏休み中なので先生も子どももいなかったが、やさしそうな女性の園長が内部を案内してくれた。どの部屋も日本の保育園と変わらないくらいきれいに飾られ、遊具や整理棚などもたくさんあった。園長の話では、子どもは百五十人。六クラスを、保育士六名と音楽専門の教師の七人で担当し、それぞれの教師が自分の担当する部屋の装飾を競い合っているのだという。ある部屋には折り紙の動物があり、私たちを驚かせた。先生たちが日本の折り紙を学び子どもたちに教えているとのことだった。

次に訪れたのは、ヒヤラガンド小・中

学校だ。寄宿舎も併設されている。ゴビ地方とは違って、山林資源に恵まれているからだろう。規模はさほど大きくないが、木をふんだんに使ったしつかりした造りの建築だ。

恰幅のいい校長から、「全校の児童・生徒は約七百人。教室が足りないのです、午前と午後の二部制で授業をしている」と教えられた。教室に並んでいるのは日本の基準で考えればどう見ても二人用の長机だが、それを三人掛けで使っても一回の授業ではさばききれないらしい。

見学を終えた帰り際、ちょうど学校の玄関口に居合わせた二人の少女が、モンゴルの伝統的な踊りを披露してくれた。小学五年生ぐらいだろうか。二人とも踊りを専門的に学んでいるらしく、音楽も衣装もないのに見事な民族舞踊を踊ってくれた。

豊かでなくとも幸せな暮らし

幸せそうに暮らすモンゴル人に出会うと必ず確かめたいことがある。「何と幸せに感じているのか」ということだ。学校訪問の帰路、セレンゲ側に架かる橋の上でひと休みした折、ハサバザールに尋ねてみた。

「ヒヤラガンドで暮らしていて、幸せだと感じることはどんなことですか」

彼は躊躇することなく答えてくれた。

「野菜を育てること。ブタを飼うこと。鹿や熊を獲ること。魚釣りをすること。けっして楽ではないし、豊かな暮らしではないかもしれないけれど、自分がやりたいことができる自由がある。それがいちばんさ。ウランバートルでしばらく暮らしたことがあるが、そこでは何でもお金、お金だった。あんな生活はもうこりこりだ。ここでは、お金はなくても、必要なものは自分で手に入れることができる」

以前、南ゴビで出会った若い遊牧民もやはり「自由であること」とりわけ「お金からの自由」を、幸せを感じることに第一に挙げていた。

田舎に住むモンゴル人は「何かに縛られず、自由であること」に、何よりも幸せを感じるらしい。日本人にも共通したものはあるかもしれないが、厳しい自然の中で暮らすモンゴル人にとって自由の意味は、日本人のそれよりはるかに重い。「自由であること」は「自分の力で生きていけること」を前提にしているからだ。モンゴルでは、日本の便利さとはかけ離れた生活に出会う。不便でシンプル極まりない生活、豊かさとはかけ離れた暮らしが、そこにはある。けれども、便利さ、豊かさ、そしてお金では得難い、シンプルな幸せがそこにあるのだ。

日本に住んでいると、便利なこと、豊かなことを幸せだと感じてしまいがちだ。交通機関や道路網が整備されていて、行

ているのは、世の中の方というよりむしろ、自分自身なのかもしれない。

#### エルデネットのナーダム祭

話をモンゴルのことに戻そう。今回の旅では、S君の実家にホームステイさせてもらったおかげで、エルデネットのナーダムを見物する機会を得た。

モンゴル相撲や競馬、弓射などの競技が行われるナーダム会場は、エルデネット市郊外の草原だった。弓射は強風のため中止となり、始めに向かったのは相撲会場だ。会場の周囲には、数えきれないくらいの出店があり、肉の串焼きや酒を売る店、おもちゃを売る店、くじ引きをする店など、日本の緑日さながらである。店を回る家族は、どの顔もにこやかで、年に一度のお祭りを楽しんでいる。

相撲会場の広さはサッカーコートが二つ分ぐらいだろうか。とにかく広い会場

きたい所へ安全かつ確実に、そして何よりも楽に行くことができる。買い物はコンビニで二十四時間いつでも可能だ。水道をひねれば、いつでも新鮮な水が出てくるし、トイレは水洗で清潔だ。

自分にできないことがあっても、とりあえずお金があればなんとかなってしまいうことが多い。それゆえ、幸せの多くがお金に依存ししやすい。逆に、お金に困ればたちまち不便な生活を強いられ、幸せが感じられなくなってしまうこともある。

今の日本では、世の中も会社も、家庭も学校も、複雑なシステムの上に成り立っている。なんだかすべてがややこしい。よかれと思っただけが新たな不満を引き起こしたり、将来の幸せを考えたい行動が現在の幸せを壊してしまったりする。人は、もっとシンプルに生きた方がよいのではないだろうか。シンプルさを失ってしまったがゆえの不幸に、日本中が浸食されているような気がしてならない。

すべてを昔のように戻すことなど、もちろんできるはずもない。しかし、シンプルな暮らし、自然の流れに沿った暮らしに今一度目を向けることはできるはずだ。そうすることで、今の日本の病んだ状況を快方に向かわせる何かを発見できるのではないだろうか。

モンゴルを旅するたびに、こんなことを考えるのだが、日本に帰ったとたんに便利さに甘える情けない自分がある。ちよつと冷えが足りないビールに不満を抱く。電子マネーが使えない自動販売機を前にすると、コインを捜しながら「不便だな」と小さな怒りを感じる自分がある。省エネ、省エネと連呼されると「そろそろうちの冷蔵庫も買い替えなきゃ」と思うし、燃費のいい車のCMを見れば「低燃費な車はいいなあ」などとつぶやいてしまう。ふと気が付くと、目の前にある便利さに満足できず、もっと便利なものを欲する自分がある。シンプルさを失っ

のあちこちに広がって、選手は相撲を取らないので、はっきりした力の差が無い限り、簡単には勝負がつかない。我が国の大相撲の行事に似た審判がついて、十数組が一斉に取り組みをする。だからどこを見たらよいか迷ってしまう。ある組を見てみると別の方から大きな歓声が聞こえて、そちらに目を移せば別の組の勝負が決まったところだ。勝った力士が驚きの舞を見せている。

カメラを構えてシャッターチャンスを待って見たものの、チャンスを逃してばかりだった。トーナメント形式の勝負が進むにつれ、同時に行われる取り組みの数は半減していくのだが、そこはモンゴルのこと、のんびりした進行なので決勝までは相当な時間がかかりそうだ。

そろそろ競馬が始まる頃だと言うので、相撲会場を後にして、車で競馬のゴール会場へと向かった。会場に着くと、先に

車を降りたA君が現地の老人に何やら話しかけられ、首を横に振っている。モンゴル語を話すことなどできないA君である。不思議に思っ

「何を話していたんだ」  
と聞くと、

「何言ってるんだか、さっぱりわからなかったけど、競馬は何時ごろゴールするのかわかって聞かれたような気がする」  
そう答えるA君の日に焼けた顔は、どう

見ても生粋のモンゴル人にしか見えなかった。老人が声をかけたのも無理はない。競馬は小学生ぐらいの年齢の子どもたちが騎手だ。しばらく待っていると、遠

くに砂埃が見えた。その砂埃が迫り来て、はつきりと馬の姿が確認できるようになると、ゴールでは歓声が沸き起こる。先頭は白馬だ。白馬の横には、審判らしき民族衣装の青年が乗った馬がゴール直前からびたりとついていた。白い裸馬に、小学校一、二年生と思しき少年が乗って

いた。次第に速度を落とし、私たちの目の前まで来た。誇らしげな顔で周囲に目をやる。家族の姿を捜しているのだろう。先頭の白馬に続いて、ゴールには小柄な少年・少女の騎乗する馬が次々に到着した。馬が着くたびに、其処此処で歓声が上がる。騎手の子どもたちの表情からは、走り終えた満足感やら、勝てなかった悔しさやらが感じられた。

数十頭の馬がすべてゴールすると、観衆は会場をあとにする。終わったらさつさと会場を去るのも、モンゴルらしさかもしれない。  
その日はヒヤラガンド村に戻り、セレンゲ川の河原でハサバザールがバーベキューをご馳走してくれた。肉はもちろん、ハサバザールが育てた豚肉だ。

日が暮れかかる頃、空には壮大な夕焼けが広がった。セレンゲ川は、その夕焼けを川面に載せて、遙か彼方のバイカル湖へと流れて行く。

ハサバザールの育てた豚肉は柔らかく、味わい深かった。食事のあとはモンゴル人が大好きな、歌とアルヒ（モンゴルウオツカ）だ。歌っては飲み、飲んでまた歌う。歌もアルヒもまた、とても味わい深かった。

前夜の、おいしい放牧豚バーベキューのおかげで、翌日は元氣いっぱい乗馬に臨めた。遊牧民から借りた馬に乗って、緑濃い草原や山裾を行くトレッキングは、南ゴビでするそれとは異なる楽しさにあふれていた。折り返し地点の草原にはこの時期に最盛期を迎える野苺の赤い実がたくさんあった。野苺を心ゆくまで味わってから、引き返した。乗馬トレッキングの帰路では、私の乗った馬が突然暴走してしまった。必死でバランスを取り、落馬はせずに済んだが、ヒヤリとさせられた。

熊撃ちの誘い

と、こともなげに言う。

「大きな熊が目の前まで近づいてきたら、怖くて引き金なんか引けるわけじゃないじゃないか」

と言いつ返そうと思ったが、一笑に付されるだけだと思いやめた。確かに的は大きいのだが、目の前まで来ればはずすわけがないはずだ。発想の違いである。そうはいっても、絶対撃ち損じるはずのない距離までヒグマが近づくの待てるほど、私の胆は据わっていない。この地をまた訪ねてみたいと思うのだが、熊撃ちに連れて行かれることを思うと、少しためらってしまう。

銀河鉄道の夜

ウランバートルへは、エルデネット始発の夜行列車の旅となった。エルデネットまで車で送ってくれたハサバザールと別れの握手をして、列車に乗り込む。S

君が予約してくれたコンパクトメントに入る。二段ベッドの四人用個室寝台だ。

なんの合図もなく列車は動き出した。遠い昔に笑顔を忘れてしまったかのような、いかつい表情の客室乗務員の女性が、飲み物の注文を取りに来た。コーヒーカー茶しかないというので、コーヒーを頼んだ。無料サービスかと思ったら、しっかり料金を請求された。

そのあとすぐ私たちは、図らずも法律違反を犯してしまうことになる。

日本国内の旅では、男が長距離列車に乗ったら「まずはビール」が定番だ。同室の四人のうち私をのぞく三人は、大のビール党である。備え付けの小さなテーブルにはすぐに缶ビールが並べられた。私もお付き合いをして、乾いた喉をビールで潤す。二口か三口も飲んだ頃だろうか、突然コンパクトメントのドアが開

か、車内巡視の警察官が部屋に入ってきた。若いが、警察官とはかくあるべしと

「ピーボ、ビシ！」  
 と声高に言う。ピーボはビールのこと、

ビシは「ダメ」という意味だ。車内に禁煙の表示はあったけど、禁酒の表示はどこにもなかったはずだ。それなのに、警察官はS君に対して厳しい口調でなにやら話している。S君も抵抗している様子だったが、結局、我々はパスポートを没収されることになってしまった。海外で警察官にパスポートを取り上げられるのは初めての体験だったので、かなり動揺していた。

警察官が去った後、S君が教えてくれた。モンゴルでは列車内でお酒を飲むことが法律で禁じられているとのこと。でも皆がその法律を守っているわけではなく、夜行列車での飲んで歌っては特にめずらしいことではないという。実態からすれば、あつてないような法律らしい。個室でもあるし大丈夫だと思って、私た

ちに法律のことを話さなかったそうだ。まずいコーヒーを飲みながら、しばし沈黙が続く。S君が思い出したように

「パスポート、返してもらいに行ってください」  
 と言って部屋を出て行った。十分ぐらい経って、S君はパスポートを手に帰ってきた。

「あの警察官、厳しすぎますよ。でも、がんばって罰金をまかせました」  
 とのこと。四人分の罰金を一人分にまけてもらったそうだ。

ビール事件でいやな思いは残ったが、数時間の後「ウランバートル行き夜行寝台列車」はすばらしい光景をプレゼントしてくれた。

深夜の大草原を走る夜汽車の車窓からは明かりらしきものはまったく見えず、闇また闇が続く。退屈なので、寝台に横になった。その時である。ふと窓を見上げると、そこにはみごとな天の川が広が

っていた。星明かり以外何も見えないので、横になって夜空を見上げてみると、

星々の中を列車が、いや自分自身が移動しているような感覚を覚えた。まさしく「銀河鉄道の夜」である。いつまでも続く銀河鉄道に興奮し、しばらく眠ることを忘れて星々の空間に身を置いた。

シンプルな幸せ

二〇一一年三月一日の東日本大震災を境に、日本はさまざまな観点からの大きな方向転換を迫られている。大きな方向転換をするときに大切ことはたくさんあるのだろうが、私は日本人一人一人の小さな方向転換も、結果として大きな方向転換の力になると信じている。

今までは違った見方で物事を見ることに。複雑な生活をよりシンプルなものに戻すこと。モンゴルの人々から教えてもらったことはたくさんある。何か一つで

もよいから、方向転換をしたいものだ。

電気も水道もない遊牧民の生活を真似することなど到底できないが、とりあえず我が家では、五〇アンペアだった電気の契約を三〇アンペアに落としてみた。五〇アンペアまで使えると思うとつい無駄な電力を消費していたが、三〇アンペアしか使えないとなると頭の中はごく自然に省エネモードに切り替わった。消費電力の多い電気製品を同時にいくつも使うとブレーカーが落ちる可能性があるもの、少しでもシンプルな生活に近づいたような気がする。

不必要なものばかりがあふれて複雑極まりない生活になっている今の日本。便利だからとコンビニがどんどん増える一方で、深夜までコンビニで働く人の家族は不便ではないのだろうか。便利はなはずの携帯メールに縛られて、食事中も携帯電話を手放せない中高生がいるというが、その不便さには気づかないのだろうか。

世の中が便利さを追求した結果、それに伴う新たな不便な状況があふれ返り、

世の中からシンプルな幸せを奪っていく。三度の食事を普通に食べることのできる幸せ。布団の上で手足を伸ばして寝られる幸せ。友達と会って話ができることの幸せ。朝、家族と「おはよう」と声を交わせる幸せ。

ごくあたりまえの日常にあるシンプルな幸せを「幸せ」と感じられるような、シンプルな心を取り戻したいものである。

海外を訪ねて帰国するたびに、日本の自然の美しさに気づかされる。日本食の美味しさに気づかされる。そして何よりも、日本人らしい気配りや心遣いなど、人としてのあたたかさに気づかされる。

しかし、同時に、それらが失われつつあることに危機感を抱くことも多くなってきた。大震災を経た今こそ、失われつつある「シンプルな幸せ」を私たちの心に引き戻したいものである。失われたた

くさんの尊い命と、家族や家を失くした被災者の方々のためにも。

— つづく —